

平成29年度 埼玉県学力・学習状況調査 データ活用事業における分析結果について

教育局市町村支援部義務教育指導課 学力向上推進・学力調査担当

指導主事

さめしま
はしづめ
橋爪

ひろき
まさる
優

指導主事

橋爪

優

1 はじめに

県教育委員会では、児童生徒一人一人の「学力の伸び」が把握できることを特徴とした、「埼玉県学力・学習状況調査」を平成27年度から実施しています。

本調査は、小学校4年生から中学校3年生までの児童生徒を対象として毎年4月に実施し、その結果は7月に各学校へ送付し、その後児童生徒本人、保護者に返却していただいております。

県では、調査の実施と併せて、約30万人分の調査結果を活用し、児童生徒の学力向上に向けた指導改善を進めるため、「データ活用事業」において分析を行っています。

平成29年度は、過去3年間に得られた調査データを、統計学や教科教育の専門的な研究機関である学校法人慶應義塾 慶應義塾大学SFC研究所へ委託し、指導と学力の関係について詳細な分析を行いました。

2 これまでのデータ分析結果

過去2年間に得られた調査データを基に、平成28年度に行った分析では、「主体的・対話的で深い学びは、児童生徒の『非認知能力』（表1）の向上や『学習方略』（表2）の改善を通じて、学力を向上させる可能性がある」という結果が得られました。

（表1）非認知能力の3つの視点

視 点	説 明
自制心	自分の意思で感情や欲望をコントロールすることができる力
自己効力感	自分はそれが実行できるという期待や自信
勤勉性	勉強などに一心に励むことができる力

（表2）学習方略の6つの視点

視 点	説 明
柔軟的方略	学習の方法を自分の状況に合わせて柔軟に変更していく活動
プランニング方略	計画的に学習に取り組む活動
作業方略	ノートに書く、声に出すといった、「作業」を中心に学習を進める活動
人的リソース方略	友人を利用して学習を進める活動
認知的方略	より自分の理解度を深めるような学習活動
努力調整方略	「苦手」などの感情をコントロールして学習への動機を高める活動

3 平成29年度のデータ分析結果（概要）

これまでの分析結果を踏まえて、平成29年度に行っ

た分析の結果、主に以下の4点について新たに明らかになってきました。

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」の実施に加えて、「学級経営」が、結果として児童生徒の学力向上につながる。
- (2) 「主体的・対話的で深い学び」の実施は、社会経済的に課題のある可能性がある中2、中3の生徒の学力向上に、より効果的である。
- (3) 低学力層にいる児童生徒は、特に算数・数学において、学年が上がるにつれて低学力層から抜け出にくくなる。
- (4) 教員が、これからの時代に求められる教育観・学習観を十分に理解した上で、指導助言を受けながら授業改善に取り組んだ場合、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が推進される。

4 平成29年度のデータ分析結果（詳細）

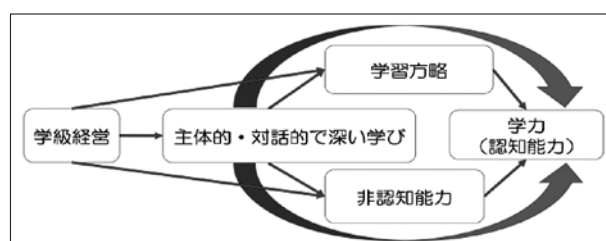
学力の経年変化と児童生徒質問紙の結果分析は、統計学の視点で分析を行う「データ分析班」と、学校への実地調査を行う「教科指導班」に分かれて実施しました。

(1) 「データ分析班」による統計的な分析結果

① 「主体的・対話的で深い学び」の実施に加えて「学級経営」が、結果として児童生徒の学力向上につながる

児童生徒質問紙調査結果から、学級の雰囲気と学力との関係についての分析を行いました。その結果、学級の雰囲気について肯定的な回答の割合が高い学級は、学年や教科に関わらず、主体的・対話的で深い学びがより推進されるだけでなく、児童生徒の「非認知能力」「学習方略」を向上させ、結果として学力に対して良い影響を及ぼすという結果が得られました（図1）。

（図1）データ分析結果の関係図



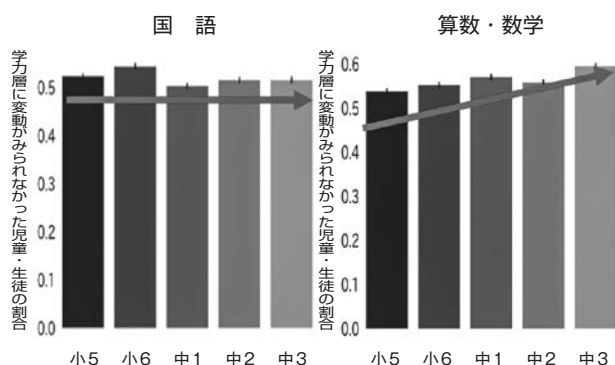
② 「主体的・対話的で深い学び」の実施は、社会経済的に課題のある可能性がある中2、中3の生徒の学力向上に、より効果的である

一般的に、塾に通っていない児童生徒は学力が低い傾向にあり、通塾している児童生徒との学力差は、学年が上がるにつれて広がる傾向にあるといわれています。そこで、質問紙調査で「塾に通っていない」と回答した児童生徒に着目した分析を行いました。その結果、特に中2と中3のうち、特に塾に通っていない生徒においては、「主体的・対話的で深い学び」の実施により、学力が大きく伸びる傾向が見られました。つまり、特に中学生年代において、「主体的・対話的で深い学び」の実施が、社会経済的な要因による学力格差を縮める方向に寄与していると考えられます。

③ 低学力層にいる児童生徒は、特に算数・数学において、学年が上がるにつれて低学力層から抜け出にくくなる

ある時点で低学力層にいた児童生徒が、その後学習の遅れを取り戻すことができたかどうかについての分析を行いました。その結果、国語では顕著な傾向が見られなかったのですが、算数・数学においては、学年が上がるにつれて低学力層から抜け出にくくなり、その中でも学習方略や非認知能力が低い児童生徒ほど、低学力層を抜け出にくいことが分かりました（図2）。学習に遅れが生じた際に、それを取り戻すためには早期の学習支援が重要であるとともに、学習方略や非認知能力を高める取組についても、併せて行っていく必要があるといえます。

（図2）学力層に変動がみられなかった児童・生徒の割合



(2) 「教科指導班」による学校への実地調査結果

教員が、これからの時代に求められる教育観・学習観を十分理解した上で、指導助言を受けながら授業改善に取り組むことにより、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が推進される

教科指導班では、データ分析班による分析結果を踏

まえた上で、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進するための方策について、実地調査を行いました。

本調査においては、まず小・中学校教員を対象とした「主体的・対話的で深い学び」についての研修会を実施しました。その後、研修会受講者の中から選出された教員を対象に、大学の研究者による授業参観及び改善点等についての指導助言を複数回実施しました。その上で、授業改善に取り組んだ教員の学級において、児童生徒の授業の捉え方が変化したかどうかの検証を行いました。その結果、指導改善前と比較して「主体的・対話的で深い学びの授業が実施されている」と認識している児童生徒の割合が増えた学級では、児童生徒の非認知能力や学習方略などの向上が見られました。

また、下記A～Cの教員に対する質問紙調査も実施し、「主体的・対話的で深い学び」への取組状況の検証を行いました。

- A：研修会の受講に加えて、指導者による指導助言を受けながら授業改善に取り組んだ教員
- B：研修会のみ受講して、指導者による指導助言を受けていない教員
- C：研修会、指導者による指導助言のいずれも受けていない教員

その結果、最も向上が見られたのはAの教員で、B・Cについてはほとんど変化しないか、逆に低下も見られました。つまり、「主体的・対話的で深い学び」を推進するためには研修会等に参加して情報を得るだけでなく、具体的な授業研究等を通して授業改善を図っていくことが重要であるといえます。

(1)及び(2)を踏まえると、各学校では児童生徒同士が良好な関係を築き、学校生活が楽しいと感じられるような学級づくりを進めるとともに、教員自身がこれからの時代に求められる教育観・学習観を十分理解した上で、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善をより一層推進することが必要だといえます。

5 最後に

県教育委員会といたしましては、日々児童生徒と向き合う先生方一人一人に「埼玉県学力・学習状況調査」の特徴や、データ分析から得られた知見についての理解を深めていただき、各学校の実態に合わせた活用が推進されることで、児童生徒の更なる学力向上につながるよう、引き続き取り組んでまいります。